

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：12602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K17436

研究課題名（和文）頭頸部がんサバイバーの災害に備える力を高める看護実践プログラムの開発に関する研究

研究課題名（英文）Development of nursing support program to enhance power which prepare disasters for head and neck cancer survivors

研究代表者

今津 陽子（IMAZU, YOKO）

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授

研究者番号：60782670

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は頭頸部がんサバイバーの持つ災害に備える力の構造を明らかにし、頭頸部がんサバイバーの身体、治療、生活を支える災害に備える力を高める看護実践プログラムを開発した。災害経験を持つ頭頸部がんサバイバーの災害の備えに関する実態調査を基に、本プログラムを作成した。研究対象者の災害経験や疾患や治療に伴う困りごとが具体的な備えにつながっていたことから、本プログラムはKolbの経験学習モデルを基盤とした4つのステップの構成とした。本研究で開発したプログラムは、頭頸部がんサバイバーの災害被害を減少させるために、非常に有用であると想定され、今後は有用性の検討や臨床実装を進めるための研究が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、開発した看護実践プログラムの基盤として、今まで注目されていなかった頭頸部がんサバイバーが有する災害に備える力の構造を明らかにした。それにより、頭頸部がんサバイバーが災害に対してどのような備えを行っているのか、災害時にどのような問題が生じるかという点が明確になり、そして、それに基づき生み出された看護実践プログラムは、頭頸部がんサバイバーの具体的な備えにつながり、災害被害の減少をもたらすと予想される。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the structure of the disaster preparedness of head and neck cancer survivors, and developed a nursing practice program to enhance the disaster preparedness of head and neck cancer survivors. This program was created based on a fact-finding survey on disaster preparedness for head and neck cancer survivors who have experienced disasters. This program consisted of four steps based on Kolb's experiential learning model, as the disaster experience of the study subjects and the problems associated with the disease and treatment led to concrete preparations. It is expected to be extremely useful for reducing disaster damage to head and neck cancer survivors, and research is needed to study its usefulness and promote clinical implementation in the future.

研究分野：災害看護学、がん看護学

キーワード：頭頸部がん 災害対策 がんサバイバー 看護支援

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災をはじめ、わが国では地震や風水害など、毎年のように未曾有の大災害が発生している。中でも人的被害を減少させるためには、災害時に被害を受けやすい「災害時要援護者」に対する災害への備えが鍵となる。災害発生後の一連の行動を取るのに支援を要するとされる「災害時要援護者」¹⁾は、一般的に高齢者や乳幼児、外国人などがあげられているが、「がんサバイバー」は含まれていない。「がんサバイバー」の中でも、「頭頸部がんサバイバー」はその疾患部位の特徴、治療による特徴から、頸部リンパ節郭清後の僧帽筋の麻痺や肩関節可動域の制限、摂食嚥下障害などが生じ、日々の暮らしを送る上で何らかの支障が生じている。彼らは災害時においては、避難時や被災後の生活など災害時に支援を必要とするにも関わらず、注目されることなく支援がなされていないことから、災害への備えを十分に行うことができていないことが想定される。

頭頸部がんサバイバーを取り巻く災害対策状況の現状に関する先行研究の現状としては、東日本大震災時に化学療法を受けているがん患者の看護に携わった看護師の体験について、アンケート調査を行った研究²⁾のように、災害時に看護師ががん看護を行う上での困難に関して焦点が当てられており、災害時のがん患者、がんサバイバーの体験に関する研究はなされていない。

これらのことから、がんの診断を受けてから治療による副作用、後遺症を体験しながら生活する頭頸部がんサバイバーの災害時の支援を検討する上で、自治体や医療施設による支援体制を中心にするのではなく、頭頸部がんサバイバーの持つ災害に備える力に着目した。頭頸部がんサバイバーの持つ災害に備える力の構造をがんサバイバー側から明らかにすることで、頭頸部がんサバイバー自身が災害に対応するために新たに獲得しなくてはならない力、つまり災害に備える力を高める支援を検討することができると考えた。そして看護の視点から支援を検討することで、看護の強みである医療的側面、生活的側面を踏まえた頭頸部がんサバイバーの災害に備える力を高める看護実践プログラムを開発することができる。

本研究により、頭頸部がんサバイバー側から明らかになった災害に備える力の構造を踏まえた看護実践プログラムを作成することで、今までの一方的な防災教育とは異なり、頭頸部がんサバイバーと看護師の双方向からの関わりで災害に備える力を高めることで、災害発生時に頭頸部がんサバイバー自身が安心して身体、治療面を踏まえた生活を送ることができる。そして、本プログラムの実践により、備蓄や避難行動などの頭頸部がんサバイバーの災害対策状況の向上、更には災害時の人的被害の軽減を可能にすることが予想される。

2. 研究の目的

本研究は頭頸部がんサバイバーの持つ災害に備える力の構造を頭頸部がんサバイバー側から明らかにする。それを踏まえて、頭頸部がんサバイバーの身体、治療、生活を支える災害に備える力を高める看護実践プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は頭頸部がんサバイバーの持つ災害に備える力の構造を明らかにするため、頭頸部がん術後患者の災害に対する備えに関する実態調査(第1部)を実施し、その結果を踏まえて行う頭頸部がんサバイバーの身体、治療、生活を支える災害に備える力を高める看護実践プログラムを開発する研究(第2部)の2段階から行った。

1) 第1部：頭頸部がんサバイバーの災害に対する備えに関する実態調査

研究開始当初の計画では、被災地内外の頭頸部がん患者の災害への備えに関して調査を行う予定であった。しかし、本調査は災害対策の整備状況を明らかにすることが目的ではなく、頭頸部がんサバイバー特有の災害への備えを明らかにすることが重要であることから、先行研究より災害経験と災害への備えは正の相関があること³⁾を踏まえ、災害を日頃から意識し備えを進めている対象者の語り、記述を得るために、対象者を被災地内居住者へと変更した。

研究期間：2018年10月～2020年3月

研究対象者：東日本大震災の被災地内にあるがん専門病院の頭頸部外科外来に通院中の頭頸部がんと告知を受け、過去10年間に再建術を伴う腫瘍切除術を行った患者を対象とし、研究者が口頭・書面で研究目的・方法などの研究概要を説明の上、参加に同意した方とした。

研究方法

質問紙調査に参加協力を得られた対象者に対し、調査票(患者基礎情報(病歴など)、治療面・生活面での災害に対する備え、健康状態(FACT-H&N))を用いた質問紙調査を実施した。また、対象者のうち、インタビュー調査に協力することを同意した者に対し、30～60分程度、インタビューガイドを基に災害時に必要なこと等について、自由に語ってもらった。

2) 第2部：頭頸部がんサバイバーの災害に備える力を高める看護実践プログラム開発

研究開始当初の計画では、頭頸部がんサバイバーの災害に備える力の構造に呼応する形で、アンドラゴジーの実践論⁴⁾による7つの学習プロセス段階に沿い、災害に備える力を高める看護実践プログラムを開発することとしていたが、第1部の調査結果より、研究対象者の災害経験が具体的な備えにつながっていたことから、Kolbの経験学習モデル⁵⁾を基盤とすることとした。頭頸部がんサバイバーの災害に備える力を高める看護実践プログラムの構成を変更した。

研究期間：2020年4月～2021年3月

研究方法

第1部の調査結果、文献検討を踏まえ、Kolbの経験学習モデルを基盤とする4つのステップ(具体的経験、内省、抽象的概念化、能動的実験)からなる看護師-がんサバイバー対話型の構成とし、1回15分程度2回のセッションからなるプログラムを作成した。

4. 研究成果

1) 第1部：観察研究 頭頸部がんサバイバーの災害への備えの実態

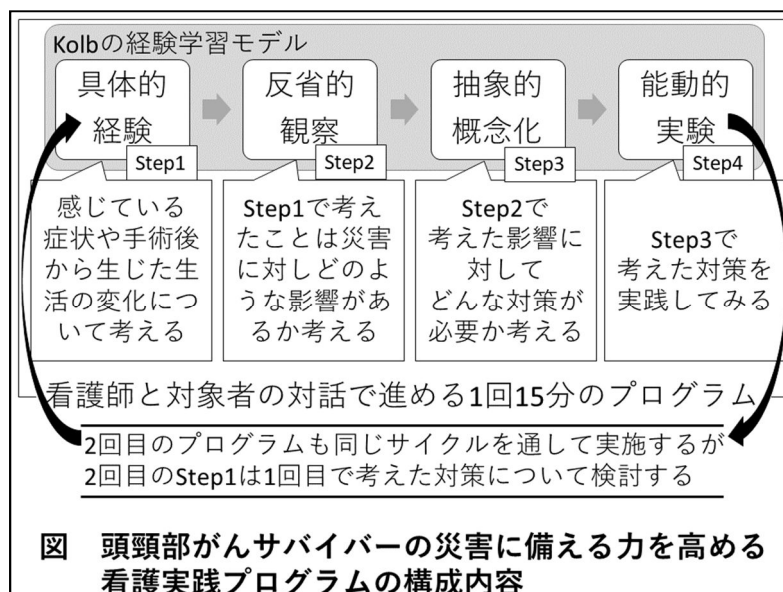
調査票を配布した20名より回答が得られた。2～3年前に手術を受けた者(9名,45.0%)、70歳代(8名,40.0%)が多く、全員が東日本大震災被災地域内に居住していた。備え始めたきっかけは「東日本大震災」(12名,60.0%)であった。現在症状を感じているものは15名(75.0%)であり、「話すこと・電話をすることが難しい」(13名,65.0%)が多かった。災害に備えたが進んでいたのは、「お薬手帳や常用薬の保管場所を決めている」(9名,45.0%)であった。一方で食品・水の備蓄をしていると回答したものはいずれも35.0%以下であった。また、感じている術後の症状と備蓄状況の違いでは、「外食をすることが難しい」と「経腸栄養剤の備蓄」との間に有意差がみられた($\chi^2=8.775$, $df=1$, $p=.014$)。約半数の回答者が術後3年以内であり、全員が東日本大震災後に手術を受けていた。備蓄は進んでいなかったが、食事に配慮が必要になる

ものは、経腸栄養剤の備蓄を進んで行っていた。現在の治療や感じている症状を踏まえた、備蓄などを進められるように支援していく必要があることが明らかになった。

インタビュー調査は12名の回答が得られ、今までの災害経験から地震が来たらどのような被害が出るか予測することや、具体的な備えを行っていたことが明らかとなった。調査票の結果と同様の傾向が見られ、感じている症状や災害経験など、対象者の具体的な経験に基づく備えが、より有用な備えにつながることを示唆された。

2) 第2部：頭頸部がんサバイバーの災害への備えを高める看護実践プログラム開発の成果

備蓄すべき物品や災害時の取り決めなど、頭頸部がんサバイバーに求められる災害への具体的な備えを習得することを目標とし、Kolbの経験学習モデルの4つの学習プロセスを基にした看護師が行うプログラムである(図)。看護師と頭頸部がんサバイバーの対話を通して、「感じている症状や手術後から生じた生活の変化」について、頭頸部がんサバイバー自身に考えてもらい(具体的経験)頭頸部がん手術による変化は災害に対しどのような影響があるか考えること(内省)を通して、対策を検討(抽象的概念化)し、実践してもらう(能動的実験)という4つのステップを開発した。災害からの被害を低下させるために非常に有用であると考えられるが、15分程度のセッションを臨床へ導入するためには、短い外来診察の中で様々な障壁があることが想定され、今後はこのプログラムの実装に向けて検討が必要と考えられた。



【参考文献】

- 1)内閣府(防災担当), 災害対策基本法等の一部を改正する法律(平成25年法律第54号),5頁
- 2)市川靖子、阿部恭子、川合みちよ、清野弘子、三浦浅子:東日本大震災時に学ぶ、災害時のがん患者に必要な支援とは?,肺癌.2014;54(5):660.
- 3)朝位孝二、古賀将太、榊原弘之.洪水経験のある住民のハザードマップ配布前後の防災意識構造の比較.土木学会論文集B1(水工学).2011;67(2):30-40.
- 4) Knowles, M.S. 堀 薫夫他翻訳. 成人教育の現代的実践 ベダゴジーからアンドラゴジーへ.,鳳書房,2002.
- 5) Kolb,D.A. Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development(3rd.ed).Pearson FP,2014.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 今津陽子、菅野久美、城向富由子	4. 巻 24(3)
2. 論文標題 特集 災害時のがん看護を考える～被災地における経験からの提言～外来化学療法室における災害時の対応力を高める訓練	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 がん看護	6. 最初と最後の頁 281-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 今津陽子、熊谷香織、熊谷直美、森朱輝、浅田行紀、今井隆之
2. 発表標題 頭頸部がん術後患者の災害に対する備えの実態
3. 学会等名 第34回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今津陽子、菅原よしえ、笠谷美保、村松真実、城向富由子、菅野久美、三浦浅子、翁長雪枝、中信利恵子、佐藤大介、山田希、風間郁子、岸田さな江
2. 発表標題 【SIG災害がん看護企画】外来化学療法室での災害対応力を向上するために～机上シミュレーションの活用～
3. 学会等名 第33回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今津陽子、青盛真紀、碓井瑠衣、渡部節子
2. 発表標題 日本における災害時のがん患者の実態に関する文献レビュー
3. 学会等名 第23回日本集団災害医学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	熊谷 香織 (Kumagai Kaori)	宮城県立がんセンター・緩和ケアセンター・がん看護専門看護師	
研究協力者	森 朱輝 (Mori Toki)	東京医科歯科大学大学院・保健衛生学研究科・技術補佐員	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------